

帰国とナホト力集結

ハバロフスクを出発する時、貨車にスローガンを書いて貼ることを許可され、それぞれの斑で工夫して大きく貼り出す。三年前、入ソ時の不安一杯の貨車輸送に比べ、今回の輸送は帰国の喜びを持った明るい旅である。各地で差入れる食糧(弁当)のパンも充分、一路南下する。シベリア鉄道を南へ南へと……。

出発して四日目の朝日本国との引き渡し港のナホトカに着く。着いて驚いたのだが、次つき入ってくる列車はすべて日本人の引き上げ集団である。貨車にはやはり大きいスローガンが沢山貼られている。そのスローガンの派手さで、闘争の強弱が解り、服装で生活の状態を知ることができる。秋口からこの頃には各地から集結してくる団体が多くなり、日に一人を越える日もあったとのこと。我々も早い団体であったが、三年も経つのに、まだこんなに多くの日本人が帰国を遅らされ、労働させられていたことに、今更ながら驚く。

広い収容所も、四、五日で四・五万人に膨れ上がり、パニック寸前。急ごしらえのテントで雨露をしのぐだけ。食糧の支給も大変である。

日本国への引き渡しのため仮収容所であるから、仕事に出るわけではなく、はじめに若干使役があるだけ。テントが沢山あり、三〜七日位で移動する。㊦〜㊧の移るテントによつて行動の内容も違ってくる。

この入浴方法は変わっている。家外で日中に入るのだ。これらの使役は㊨番テントの者がする。入浴は㊩番になつてから。外側を扉で囲い、裸

になつてその中に入る。一度に十人位。地上二メートルにパイプが一本走っている。その下に一列に並ぶのだ。合図により、適度の湯が小さい穴から適当に落ちてくる。それを体中に掛ける。シャワーは二・三分で止まる。石鹸で体中を洗い頭も洗う。シャボンだらけの体でパイプの穴の下で待つ。再び湯が出る。今度は五、十分位の時間がありすっかり洗い流すのである。これは雨の日ではできない。第㊨テントに入る頃に列車も来なくなつていた。

だが、ここまで来てまた問題が出てきた。今年一冬この町(ソ連)に残つても良い者、体の弱い者を先に帰し、自分は残つてやるという者は申し出よとの通達が出る。今まで、収容所や昨日まで元気の良かった執行部や行動隊の者は一言も発しない。誰しも帰りたいのは同じなのだ。

冬の厳しさを思うと声を上げる者はない。しかし、最後には二・三人は申し出たようである。我々より後にナホトカに着いた組は、すぐまた山へ帰されたとか。一二月になると輸送ができなくなり、引き渡しが中止されるとの事。港が凍り、船が入らないということだったが、引き揚げを待つナホトカの基地が全部テントで寒さを凌げるものではなく、この施設上、冬季間の輸送中止が本音のようであった。

このナホトカへ着いた半分以上の人が(後続者)今冬も居残る事となり再び列車で引き上げていった。ソ側の輸送計画の不幸により、帰国の喜びを抱いて、ナホトカまで来て、日本海を見、はるか海の向こうの故郷を思い出したのも束の間、再び元の収容所へと帰つて行く同胞を思うと、やりきれない思いだった。

十一月も半分過ぎて、第㊧テントへ入れられる。このテントだけは鉄鎖が回され、外部との折衝が断たれる。ここに入るまでは、何回かの検察官の持ち物検査がある。あとは乗船を待つだけ。しかし監視も厳しくな

り、入口にソ連兵の歩哨が夜通し付く。

二十三年十一月二十日。帰国船が着き乗船のときがきた。持ち物は雑のう袋一個。中身は飯盒と日用品の若干だけ。乗船する船は、信濃丸で五千トン以上のかかなり大きな船である。一回の引き渡し人員は二千名と決められているとのこと。船にはその倍以上は乗れるのに……。昨夜は一晩寝られず、早朝起きて準備する。心は躍るが、表面には出されない。船に乗り出港するまでは、何が起るか分からない国なのだ。

広い埠頭に二千名が集まる。日本側との引き渡しが終わる、次々乗船が始まる。いよいよ日本へ帰れる。その時が来た。順番がきた。多くのソ連監視も中を通り、船の棧橋に足が掛かると、感動が湧き上がり目頭が熱くなる。一目散に船上へ駆け上がる。足取りは軽く宙に浮くよう……。船上では、船長、政府要員はじめ係の人たちが一人一人に対して、「御苦勞さまでした。」と迎えてくれる。船の上はもう日本人ばかりだ。長い捕虜生活から解放されたのだ。皆喜びを体一杯に表し、夕方いよいよ出航となった。

長かった苦しい日々、色々な仕事、多くの足跡を残してきたソ連の極東地区。今後二度と訪れることもないだろう。極東の山並みが、夕暮れの中に次第に遠ざかる。苦しみの中にも、ソ側一般人との交流もあり、友のことが胸に浮かび感傷的になる。

船中は船中で厳しい規則があり、その指示に従う。今までの執行部の威厳はどこへやら、すっかり影をひそめてしまう。今迄、執行部や行動隊に苛められていた者の方が元気よくなる。共産主義の事は一言なりと言えない状態であった。これは乗船してからすぐ船長の話の中で口止めされた。

親しく苦勞を共にした仲間や友と語り合う。また、船の中では日遅れ

の新聞が配布される。日本の近況、変り方が一目で解る。アメリカ進駐軍の状態、日本将兵の帰国で、ソ連からの引揚げが一番遅れている事などを知る。

船上ではじめに出た食べ物は、白米のおにぎりと味噌汁、タクアンの漬物だった。この香り、この味、三年ぶりの味。望郷を一層あおられる。寝ても覚めても故郷のこと、親兄弟のことばかりの話。しかし、このような中で執行部は沈黙を守りながら下工作をやっている。

ということは、帰国が決まり出発前、全員集会の席上、執行部提案で帰国したら全員共産党へ入党することを決議していたのだ。それを陰で確認する行動であった。日本上陸してからの結束を促していたようだった。大方の者は、相変わらず表面だけの相槌だけ。

明日は夢に見た日本への上陸なのだ。日本に着いたら、それぞれ故郷へ帰るので散りじりとなり、束縛を受けることもなくなるからだ。満州へ渡るときの船は、機雷と潜水艦攻撃の不安があつたが、終戦から二年が過ぎ何の不安もなく、明日の上陸を楽しみに一夜を明かす。

## 帰国・日本上陸

昭和二十三年十一月二十三日早朝。誰ともなく日本が見える。日本だ。日本だ。次々伝わり船内が騒然となり、皆デッキに鈴なりになる。これが三年間夢に見た故郷日本なのだ。胸がジーンとしてくる。苦しみを乗り越えて来たればこそその感動である。ある者は手を合わせて拝むものもある。

船の中で、船員などから聞いて、日本国内の状況はすぐ伝わっていた。アメリカの空爆で東京は全滅に等しく、各市町村も全滅したところもあ

るとか、長崎・広島市が一発の爆弾で全滅したと聞いた時には、信じられなかった。

北海道も大分空襲を受けた様子との事。しかし、北海道でも中部の田舎、陸別村は大丈夫だろうと思いつながら敗戦後の世相が心配であった。両親、兄弟姉妹、親戚の人たちは無事であろうか。あの人は、あの子は元気であるだろうか。人の話では信じ難く不安が募るばかりであった。

船は港外に停泊。どうやら着いたのは、舞鶴港とのこと。検疫官が乗り込んで来て、検疫が行われる。

午後から上陸が開始される。信濃丸は沖に停泊したまま、小船が次々接船し、それに五・六人ずつ乗り渡し場のようにならへ着く。上陸。心は躍り、足取りも軽い。夢にまで見た日本。日本の土へ第一歩。まるで夢見心地だ。雲の上を歩いているようであった。

沢山の人達が出迎えに来ていた。誰彼となく手を取り「御苦労さまでした」「お帰りなさい」と迎えてくれて、共に喜び合う。

ここは舞鶴の軍港で、基地があつた処で、兵舎もあり、設備もあつて引揚基地として、ここに上陸し色々な手続きを行うのだった。指示に従い進むと、大きい建物の中へ入る。中には沢山の台が並んでいた。台の上に持つてきた雑のう袋の中身を全部出す。体につけている物も全部脱ぎ台に並べる。素足に素つ裸で入口と反対方向へ進む。大きな建物が並ぶ。これから入浴してもらうとの事。二千人の引揚者を少ない時間で終わらせるので、すべて流れ作業のように事が運ばれて行く。

浴場入口で小型石鹸と手ぬぐいが渡される。次へ進むと、中は大浴場で八列横隊に並ぶとそのままの列で前へ、浴室に入っていく。七・八十が入り一定の時間に扉の合図で上がって、体を洗い次の浴室に入り、湯の中を歩きながら前へ進む。体を拭いて尚進む。褌が渡され身に着ける。

次に名前をいう。係りの質問により頭から足まで裸のサイズをいう。記録された用紙が渡される。次の建物に進むと一〜二十位まで番号がついていて、順次進む。再び腕を前に出すと毛布他身に着けるもの全部（新品）が渡される。すごい量だ。特大の袋（リュック代用）も身に付けた物以外全部袋へ入れると、前に脱いでおいたところへ行く。全部消毒済になつていて、それも持つて集会場へ。今度は部屋へ案内される。畳の部屋だ三年ぶりに座る畳、畳の香り。皆畳の上で大の字に寝て感触に浸る。ごろ寝ながら、畳の上で日本に上陸して始めての一夜を過ごす。

明けて二十四日から色々な手続きや取り調べが行われる。本籍、軍歴、家族の氏名など細密に調査され、その他に身体検査など二千人の一人一人調査するのだから日数も掛かる。一方では入ソ場所、仕事の内容、共産主義の教育や活動などを調べられる。

一回目からは部屋も別で、進駐軍も調べに立会質問もする。ある程度ソ連での共産教育や行動状況は知つていて、尚個々の話を聞くためであつた様だ。その上、各收容所で指導的立場に居たものなどは、名前が解つていて度々呼び出しを受けていた。強度の調べ室は、鉄格子の入口でMPが立つていた。ここでは徹底した取り調べで、厳しく責められたようである。米国の調べが主なようである。五・六回も調べ室に呼び出された者もいた。また、着いて翌日、一人百円札九枚九百円の支給を受ける。昭和十九年入隊のときは給料が月三十円位であつた。百円でも大金だが、それが九百円の支給で吃驚する。昭和二十一年に貨幣価値が変更されていたのだつた。

引揚者のための売店もあつた。何でもあり、買うのは自由。三年間口にしたこともなかつた物ばかり。九百円という大金を渡されたが、使うのが怖かつた。どんな品物を見ても、四年前の何十倍もする。しかし、食べ

てみたい。おいしそうだ。友と果物や菓子を買って食べる。お金はたちまち少なくなっていく。

友は舞鶴の近くのので、「俺は近くですぐ付くから金はなくなってもいいが、お前は遠いんだから少し残しておけ」といつてなるべく自分に使わせないようにしてくれた。

また、ここに着いた次の日、全員に電報を打たせる。電文と住所を書いて提出すると、援護局で打ってくれる。しかし、黙って帰り吃驚させてやるといふ者、住所のわからない者。打つところのない者などさまざま。広島市や長崎市の者、また、大都市や工業地帯の出身者も居て、連絡先のわからない者も多々いた。

二年間共に苦しい生活の中助け合ってきた友と別れる時が来た。親友のほとんどが関西と九州の人であった。

## 帰郷・列車輸送

舞鶴駅から各方面に向けて出発する。東京・東北・北海道方面、新潟方面、北陸・山陰方面、大阪・関西・四国・九州方面など。各地方別に引き揚げ列車が出て行く。近くの人は親兄弟、家族が迎えに来、対面の喜びを分かち合っている者も居る。また、多くの人が見送りに来ていた。知らしき人あるいは親類かも知れない。年配の婦人が我が子を探して、誰彼となく訪ね歩いていたが、まだ帰らぬ息子を探していたのかも知れない。

東京方面への列車に乗ったのは五百五十名ほど、東京へ着くまでの人は、それぞれの駅で下車していく。翌朝列車は上野駅へ着く。ここから何処をどの様に歩いたか定かではないが、共産党本部のある近くの広場へ行

き、党の幹部の挨拶を受け、入党手続きを済ませ、再び列車へ乗り込む。東京（上野）を臨時列車が出発するときには半数位になっていた。東京で歩いた時は、警察が同行し一定のコースが定められ、他へ出ることは固く禁じられた。これも進駐軍の指示だったようである。東京の空爆の跡や様子は知ることができず、引揚者は一般人との接触は厳しく監視され、一般人が近づくと警察が追い払うという状態であった。全く危険人物の扱いである。同じ日本人なのに。

上野をその日の夜中に一路東北へ向けて出発する。列車が停車すると必ず湯茶の接待があり、時間になれば、弁当が持ち込まれる。

列車の中の連絡や接待は援護局の職員が同乗して一切やってくれる。狭い所で寝ることが慣れているので長い列車の旅も左程苦にはならない。列車が停車するたび、下車する人が多くなり（東北出身者が多い）青森へ着き、連絡船に乗る頃になると、五、六十人の引揚者だけとなる。

## 北海道

連絡船に乗り、船が函館へ着けばよいよ北海道だ。三年半の間とはいえ、五年も十年も経ったような感じがする。戦争と敗戦。戦場とはならなかったものの、多くの空爆を受け、あまりにも大きな社会や故郷の変貌で、まるで浦島太郎のような気持ちである。

船の中も一般人との接触を禁止され、一か所に集められる。明朝早くに函館に着くと係の説明があり、函館で下船するとそこで朝食の弁当が渡される。これで弁当の支給は終りになるので、その後は各人で用意してくれとの事。

北海道も広い。近くへ帰る人は良いが、遠くへ帰る人はこれからも大変

だ。自前と言っても持ち金が問題である。自分も持ち金は百円札一枚だけ。これでは弁当も買えない。しかし、北海道の者は、皆携帯食のパンが支給されていた。それがあるだけで他の者も同じ状態だった。俺は何処どこまで、あと何食わなければならぬが、なめに、一食、二食、山にいた時のことを思えば大丈夫とみんな語り、水だけ飲んでいても帰れると皆元気が良い。函館へ着いたのは、朝がやつと白々と明けてきた五時頃であった。青森まで迎えに来ていた家族もおり、船の中は夜通し賑やかであった。

自分も電報を打ったので、もしか何処か途中まで迎えにいるかも知れないと僅かの望みを抱いていた十一月三十日五時三十分。いよいよ下船、北海道へ着いた。

日本へ上陸のときは違う喜びの鼓動であった。一般の人とは別の下り口より下船する。胸はわくわく足取りも軽い。改札の外には早朝とはいえ、沢山の迎えの人がいる。もしかあの中に誰か迎えに来ているかもという淡い夢を抱きながら改札へ。改札を通り右へ曲がろうとすると、若い男が近づいてきた。マスクをかけているので顔は解らない。

## 再会

しかし、その姿恰好を見た瞬間「弟だ」と解った。

「静か？」(弟の名)

「兄さん」互いに同時に呼び合い、手を取り合つて三年ぶりの再会を喜び合う。自分の淡い思いが通じたのだ。列車で一昼夜も掛かる遠い函館まで迎えに来てくれた事が本当に嬉しかった。

陸別からの出迎えについて皆が

「若し会えなかったら、行き違いになったら」と心配したようだ。

しかし、函館に友達がいたことと鉄道員になった弟の経験から、復員列車のダイヤを調べてやって来たのだとのこと。会うまでは色々な不安があり、何回も棧橋まで足を運んだとの事であった。

下船して函館援護局の人より帰郷方面に分けられ、次の列車時間その他細部にわたつて説明を受け、最後の弁当の支給を受ける。ここで仲間と最後の別れを告げる。釧路方面への列車は昼過ぎの出発である。

弟も自分が入隊後鉄道に就職していたのだった。当時十七歳の少年も背も伸び自分と同じくらいの立派な青年となっていた。函館の友人と連絡を取りながら、援護局で引揚船の到着を調べ待っていたとの事。しかし不安もあつたという。若し互いに解らず会えなかったらどうしようかと思っていたと・・・。

まだ早朝であり、列車の発車まで半日あるので、弟の知人の家へ案内される。知人の家族のみんなに心から喜んで迎えられた。この友人は、先年「静雄」が盲腸で北見の病院に入院していた時、北見へ単独で仕事に来ていて、やはり盲腸になり同室となったことから、函館から家族がやってくるまで、母が何かとお世話をしたことで知人となったとのことであった。友人の両親も我が子の帰還のように喜んでくれた。帰国して初めて家庭での食事を味わう。暖かい味噌汁、白米のご飯、色々なおかず、涙の出るほど嬉しかった。

家族の人たちや弟も自分も体のことを心配してくれたが、今の自分も体も健康でこの通り元気だから心配してくれるなどいっても、長旅で疲れたらうと心配してくれる。ということは、今までの帰還者は身心共に疲れ果てて帰ってきて、家に着くなり倒れる人が沢山いたからだという。

それで帰還者に対する心配が強かったようだった。

少し休んでくれと床まで敷いてくれるが、そんな心配はないからということ、固辞すると、ようやくその元気に安心した様子である。朝食後、街の朝市(戦後復活した)を見に街へ出る。兄弟でこうして二人で街を歩くのも初めてで、昔懐かしい物、珍しい物が沢山出ている。戦時中にはなかった物が、戦後しかも敗戦国の今、三年間の間にこれほど復興したことに驚くばかりである。

今まで、戦前の統制で物の不足時代に育ち、戦後ソ連の復興状態を見てきた中で、今自分が歩いている街の様子を見て、別世界からやってきたような感じがした。一般人と復員者は服装でも一目それとで解る。だが、今の自分はどうな大勢の中にあつても、人を人と思つていただけで、何の反応も受けず不思議な存在であつた。しかし、人の言動、行動に対して直観的に反応する体質になつている自分を解つていながら、街の中に広がるこの動きに対して只驚くだけであつた。

朝市の店頭に出ている品目の多さに吃驚したが、それより価格を見て更に驚く。とてつもなく高価な物ばかりである。百円しか手持ちのない自分などには、とても手が出ない。せいぜい一個か二個しか買えない。

「何か欲しい物や食べたい物があれば買おうよ」

弟が言つて呉れる。どれを見ても何百円、何千円ではとても……。でも弟は私の好きな大福餅を買つて呉れる。

「十個下さい。」というので吃驚、

「こんな高い物をそんなに沢山」とお金が心配だつた。

そうしている内にも、リンゴやミカンを沢山買うので、お金はどうなつていられるのだろうとこちらが心配になる。汽車に乗つてから長いからと煙草や他の物を買つて呉れる。

知人の人たちは皆良い人ばかりで、我が子のように歓待をしてくれたばかりか、沢山の白米の弁当や玉子焼きまで作つてくれ、寒い中を駅まで見送つてくれる。駅に着くと仲間の一人がポツンと一人座っていたのでどうしたと聞くと、

「俺の帰る汽車は夕方だが稚内の家まで帰るのに、まだ一昼夜かかる」という。

「俺、金が一銭もないから、もらつて来た衣類を売ろうと思う。何処か買つて呉れる所はないだろうか」と言う。

それは困つた、それより援護局へ行つて相談した方がいいと、弟に援護局の場所を調べてもらつて、行くように勧める。その後どうなつたか……。自分も弟の出迎えがなかつたら彼と同じであつたのである。函館へ着いても何処へも行くあてがなく、午前中駅に居て人ごみを見ているだけだったかもしれない。

十一月三十日十二時四十五分発車。釧路行きの列車だ。釧路方面行きの列車には、自分を入れて八人だけとなる。復員者と一般乗客は別々で、家族でも復員者の車両には乗れない。警察と公安員の目がうるさく、絶対に一般客と接触させない。客車は、中程に一両のみ復員専用車両が連結され、復員列車と表示されている。

入口の両側には公安官が立ち一般客を締め出す。我々八名だけが、公安官の誘導で先に乗車する。我々が席に着くと、一般客の乗車が始まる。すごい人の数だ。列車はたちまち満員となり立客もいる。我々の車両は八人だけでガランとしている。一般客が乗車しようとするが、公安官は絶対に乗せない。家族・親戚の者は、復員者の要求でどうにか同席が許されたが、我々八人の話合いで、これは不都合な話だから、空席のある分一般客を乗せるように、再度交渉する。

## ソ連復員者への疑惑

公安官の話では、国(政府)からの指示で、復員者と一般客は同席させぬようにとのこと。この車両は復員者の専用車両のため一般客は乗せられないとの事だ。それは不都合だ、他の車両は混んでいて皆立っているの、こちらにも乗せるべきだ。今までとは違う元気の良い我々の交渉にたじたじだ。

強硬な要求にも応じないので、上司を呼んで来いと要求すると、仕方なく、

「それでは上司と相談してきます」と引き下がる。

上司を連れて戻る。

「皆さんが中央の席へ集まって戴き、ゆつくり席を取ってもらった後、空いた席を一般客に座ってもらいます。」ということを決着する。

復員者へのせめてもの処遇のつもりか、これではあまりにも矛盾している。また、一方では一般客との接触を避ける意図も感じられ、我々を危険人物扱いしているのかと交渉すると、流石の公安官も吃驚していた。

舞鶴に上陸してからの取り調べ方や出発してから途中での一般人との接触の警戒が、今八人の少人数になっても行われるということは、今のアメリカが如何にソ連の共産主義を敵視しているかが解る様な気がする。その国に三年も居たものが帰ってきたので警戒するのも理解できるが、あまりにも度が過ぎてている。

一般客が空いている席に着いたが、我々を警戒している様子がかげえる。無理もない。我々復員者の元気な姿を見ては、ソ連帰りで共産(?)バリバリの者ばかり。先の公安との交渉・やり取りを見ているので尚のこ

とだろう。

我々にしてみれば、一般人との接触は初めてで、話がしたく、話しかけても返事だけで会話にならない。公安の目もあるので、尚の子と警戒している様だった。

函館からはゆつたりと座席に座ることができた。

十一月末の北海道はすっかり初冬の気配で、殺伐とした風景が続く。駒ヶ岳の山頂は冠雪し美しい。長い間何事もなかったかのように…。

列車は一路北東へ北東へと驀進して行く。車外の景色は、戦争を知らぬかのように、北海道を去ったときと同じである。この美しい自然が戦場とならなかったことがせめてもの幸いであった。列車の中で、家族のこと、職場のこと、戦後の世相などいろいろ語り合うが、三年間とはいえ、あまりにも大き過ぎた変貌は語りつくせず、話は尽きない。

札幌へ着き、すっかり暗くなる。駅は昔の明るさに戻っていた。弟が駅の売り子より何か買ってくる。夕食にしようとして差し入れの弁当を開く。一日分もある様な量である。

半数位の仲間が家族の迎えがあり、食べ物を用意もあつて駅弁を買うことも出来たようだが、迎えのなかった他の者は金もなく、弁当も買えず、只寝たふりをしている。弁当も沢山あるので、仲間に分け与え、一緒に食べる。初めは遠慮していたが、無理にすすめる。状況が解っているだけに自分たちだけで食べるわけにはいかない。もし、弟が函館まで迎えに来てくれなかったら、自分も同じ状況になっていただろう。それを思うと尚更のことである。一つの物を分け合つて食べてきた仲間なのだから…

朝市で買つて来た果物も仲間と分けて食べた。

列車の話は尽きることがなく、夜中に少し眠りに着いただけで、目覚めるともう夜明けであった。峠を下っている処であった。新得駅で仲間

が一人下車する。駅には沢山の出迎いの人であふれていた。仲間が少なくなるほど別れがづらい。ホームと車窓から互いに励まし、固く手を握り合い健闘を祈る。帯広駅まで義兄が迎えに来ているかも知れないという。愈々皆に会える心が弾む。

客車に乗ってから感じたことは、乗客の多いことと、我々に対して遠慮しているのか、警戒しているのか、接触を避けているように見えることである。海外からの引揚者、復員者はほとんど帰国し、残っているのはソ連からの復員者だけという。

ソ連と言えば、子供でも共産党の国であることを知っている。日本は国政からして共産党に対して取り締まりを厳しくしてきた。従って、一般にもこれを毛嫌いしてきたが、敗戦によってアメリカの軍政下になり、資本主義、軍国主義から民主主義が布告され、色々な解放が行われても一度に人間の気持ちが変わるものではない。

ある者は時代の波にすぐ乗れる者、波に乗れずに旧体制の考えからぬけ切れぬ者等さまざまである。解放されてまだ三年。やっと民主主義の動きが始まった頃に、ソ連から多くの復員者が帰国してくる。二年も居れば相当共産党の教育を受けて帰ってくるであろうことは誰でも推察できる。復員者が共産党のバリバリと思われても仕方がない。

アメリカは、ソ連を最も警戒している国なのである。その国に二年も居た者の帰還だから無理もない。我々多くの者は、ただ帰国のみを望み、ソ連の政策である共産党員教育も、生き延びる為の手段としてやって来た者ばかりである。多少は、ソ連労働者と共に働き、その生活を目的のあたりにして、共産主義社会の困窮の矛盾を知り尽くしているだけである。

ソ連労働者のように一生ノルマとの戦いとなると、限度があり、我々のように捕虜となれば、国際法上長く留めておくことはできない。その為

には五十八万の捕虜を戦後の復興に使い、ある程度成果を上げてから帰国させるという政策を取ることは、日本人であればだれでも解る。

ノルマで働かされ初めは苦勞の連続であったが、我々も生きる為には少しでも能率を上げ、ノルマを良くして生活の向上に努め、その結果、今回皆元気で復員することができたのである。その元氣姿を見ただけで、バリアリの共産党員と見られては迷惑千万である。

今までの復員者と違うのもその為で、労働者の国なるが故に、日本人のような働き者が幸いしたということである。三年前六十五キロであった体重も八十キロの巨漢となつて帰つて来たのである。実の弟でさえ吃驚するような変りようでは、他人から見ると尚更ソ連帰りの風采が異様に見えたのだろうか。

新得駅では早朝ながら援護局の暖かい湯茶の接待を受け、心も温まり嬉しかった。残る復員者は五人となつた。帯広駅にも沢山の歓迎の人々が出ていた。親戚の人たちも出迎えてくれた。会う人、合う人と手を取り抱き合う。生きて帰れた嬉しさが体中に溢れる。後で思い出しても誰かが居たのか、誰と抱き合ったのかも解らないほどの感情であったのだ。

誰も彼も「御苦勞さまでした。」と手を差し伸べて呉れる。「あれっ」あんな親戚の人誰だったかなあとと思うほど、親見になつて喜んでくれたのである。戦争で我が子を亡くした人か、まだ未帰還者の家族か解らないが他の家族の帰還を喜ぶ姿に強く心を惹かれる。生きて帰らずと故郷を発った者が、今数時間で父母の元へ帰れる。居ても立つても居られない心境で落ち着かない。

最後の乗替駅である池田に着く。最後の四人と別れる時がきた。最後の別れに、思い出の労働歌を歌つて別れようと決まり、自分は下車し、四人は列車の窓から身を乗り出して歌う。

五人で歌う。その声はホームに広がる。在ソ中我々の励ましとなった労働歌。しばし何曲か歌ううちに発車のベル。別れは辛くさびしいものである。我々の声をかき消すように汽笛一声。生死を共にして来た仲間との別れは辛い。

池田駅には自分より四年前に出征した兄が迎えに来ていた。七年ぶりの再会である。共に抱きしめ再会を喜ぶ。兄貴も車中の人も、今ホームで見せた行動に吃驚したようだ。今までこんな帰還者の風景は見たことがないとの事だった。池田から北見行きの列車に乗る。入隊前鉄道員だった勤務地に入り、自分の庭のように感じる各駅で知人や仲間が出迎えてくれた。もうここまで来たら早く両親に会いたい、顔が見たい。列車の速度がもどかしく感じる。あまり元気が良いので、逆に心配する兄弟。色々気を使って呉れるが、じつとしていられないのだ。

この駅、あの家、懐かしい建物、山川はそのままの姿を見せている。十九年から二十年にかけて、北海道もかなり空襲を受けたと聞いていたので、随分と心配していたが、戦後三年その痕跡は全く見られず、昔そのままの街や山川だ。国は敗れたが、美しい山川があれば幸福はつかめる。

三年の苦しい闘いを生き残り帰れてよかつた。昔懐かしい友が各駅で迎えてくれる。池田駅からの列車は特に遅く、停車も長く感じる。隣の駅を発車。もうじつと座っていられない。気持ちはいもう母の元へ。

初冬ながらソ連の殺風景な景色とは違い、家を見ても山を見ても温かみを感じる。人にしても、日本人には明るさがある。勝者と敗者とはいえ、三年を経てソ連との違いを感じ日本人でよかつたと思う。共産主義社会の戦後の復興の状況と、民主主義社会の復興の早さの違いも驚くばかりである。(アメリカの援助のお陰かも……)

## 帰郷

昭和二十三年十二月一日。陸別の街が見えてきた。我が懐かしき故郷。遠方信号通貨合図の汽笛一声……「帰って来たぞー」と代わりに叫ぶがごとく。遠い満州で終戦。酷寒のシベリアへ送られ、三冬の苦しい生活の中で、毎日毎日想い出し、夢にまで見てきた故郷。

「さあ、陸別に着いたよ」と誰かがいう。

それが合図のように、身体中がジーンと熱くなり、涙がどとと溢れ出る大の男の大きな顔が涙でぐしゃぐしゃとなり、拭いても溢れ出る。恥も外聞もなく嬉しさとも喜びともつかぬ。苦境の中での望郷が今実現した感動の瞬間だ。

沢山の人々が迎えに来ていた。下車の前に心を落ち着けようとするも駄目だ。デッキに立った時は涙で目が霞む。下車の第一歩。それは今までに味わったことのない感動である。ホームへ降りた瞬間へタヘタとその場に座り込みたい心境になる。大勢の出迎え。その中に誰かを探し求めた。父の姿が目に入る。只今、父の手を強く握りしめる。涙があとから、あとから溢れ出る。誰彼となく、お帰り、只今と握手を交わす。涙で誰が誰だかわからない。

生死の境で戦い、苦境の中から帰還した者にとつて、この瞬間は、何事にも代えがたい喜びである。兄弟三人、共に元気で再会出来た。駅から兄弟揃って街の中を家路につく。戦地へ二人の息子を送りだし、三年間の戦後生死不明の一人が帰り、今息子三人が揃って前を歩く姿うい見る父の喜びの眼差しを背に受けながら、懐かしの我が家へ向かう。

## 父母の懐へ

家の近くの街角が向こうに見えてくる。弟が、お袋さん、あの角まで来ている。という。一瞬目に入った瞬間にもう走り出していった。角に母の姿はなかった。只、一目散に五百メートル位走る。我が家だ。

二度と帰れないと思いつながら去った四年前と変わらぬ、古びた家だが懐かしい我が家である。玄関を入り、只今と中戸を開ける。母は、流しの窓外を見ている。泣いているようだった。

もう一度、只今と言って、母に近づく。母の背中から、  
「母さん只今」と言つて、抱きしめる。

どんな時でも一番先に思うものは母の姿。呼ぶのも母の名であった。「親の思いは海より深く、生みの親ほど尊きはなし」母は偉大な人である。

「よう元気で帰ってきてくれた。元気で何より」しばし涙、涙。

そのうちに、家族の者、親戚や知人が家に集まつてきた。最後に残った息子の帰宅に両親の喜びようは大変なもの。狭いながらも楽しい我が家である。両親はじめ一同は、自分がこれほど大きく、そして太った元気な姿を見て、今更吃驚していた。

ソ連で何を食べていたの？どんな生活だったのか？と驚くばかり。尚も体は大丈夫か、どこも悪くないのか、と心配する。

十二月ともなれば、ここも相当寒くなるが、シベリアの寒さとは比較にならない。部屋の中では尚のこと、下着一枚となつて、労働で鍛えた体を見て父母も安心したようだ。終戦後、復員者の多くは、やっと家路に着き、家に入るなり倒れたり、病気になる者が多かつたとの事。我が子もそのような姿で帰るのではと常々心配していたのだという。

家に帰った喜びと、今まで張りつめていた気苦労が、我が家に着いて疲れが出てくる。次々帰還のお祝いに来る知人の応対も少なくなり、気持の張りがゆるみ、一寸横になった瞬間深い眠りに着いてしまった。どれほど眠つたであろうか、ここは何処かな……と、夢うつつに話声が聞こえてくる。

「随分苦労して来たんだろうなあ。長い間寒い所で帰りたい一心で働かされ、苦労して帰ってきて安心したんだろう。」

母の声、姉の声、叔母の声。あ、俺は帰ってきたんだ。ここは我が家なのだ。そう思うと涙が出てきて、寝ている枕を濡らす。叔母はそれをそつと拭いてくれた。そうしている内に再び深い眠りに落ちて行く。

深い眠りから覚めたのは、日が短い初冬のすつかり外も暗くなった頃であった。夕食の膳を囲んだとき、一揃いの食器が出されていた。これは、入隊したとき、昭和十九年九月二十日から、陰膳として母が盛つてくれた器であるとのこと。今日はこの食器で四年ぶりに本人が頂く。

毎日毎日、我が子の無事を願つて陰膳をし、お宮参りをしてくれた。母の願が通じあらゆる苦難を潜り抜けて、無事帰ることができた。

今後このような悲惨な戦争を二度と起こさない世界になつてもらいたい。そして平和な世の中になつてほしい。戦争で死んでいった何百万人の死を無駄にするようなことがあつてはならない。

平和で美しい日本を守り続けることが、戦没者へのせめてもの償いである。多くの同胞は皆、家族を想い、日本国のために死んでいったのだ。若い時代を戦争と敗戦の犠牲に費やしてしまった。

しかし、この苦労と経験は、今後一生涯自分のため、世のために生かして行かなければならないと深く心に誓うとともに、再び戦争へ向かうこ

とがない様に、戦争の体験を語り継いでいかなければならないと思う。

了